封建制下の隠岐牧畑

——島嶼社會の經濟的構造と解體（その1）——

田 中 豊 治

I. 序 本文は島嶼經濟が如何に成立し、如何なる構造を持ち、近代的貨幣經濟の圏内に於いて如何にその構造を解體し、世界經濟に對處したかを隠岐牧畑に例を取り研究し、孤立環境の地理的意義を論じたもので、續いて發表する水産、森林、牧畜その他の島嶼經濟の構造と解體論の一部をなす。

II. 封建社會に於ける隠岐牧畑 隠岐は島前、島後の2島群に別れ、牧畑は現在島前に存続している。その發生時代は不明であるが慶長12年の檢地帳まで記録上に於いては遡れる。牧畑が隠岐にとつて經濟上特に重視されたのは近世封建社會の經濟機構の下であつて、資本主義の發展に伴つて衰退したらしい。⁽¹⁾從來牧畑が隠岐の社會經濟上如何なるウエートを持っていたかを數字的に明にした研究はなく特殊な農牧形態として専ら機構に關する調査が主であつた。筆者は昭和14年以來隠岐各村に於ける古文書を集め、是より近世封建社會に於ける牧畑の村落經濟上に於ける意義を分析した。第1表は寛政7年の郷帳より⁽²⁾作製した各村別石高、田畑反別表である。石高は田高、麻畑高、上畑高、牧畑高に細分され記入されているが農地は田、畑に2分されて居るのみである。麻畑は「里畑に而地面勝れ候所……⁽³⁾麻を作り其後へは大根を作申候……」で年々畑、垣ノ内とも言う。上畑は麻を作らない普通畑である。偕第1表を見て特に注意を要するのは田高が

(1) 拙稿、隠岐牧畑衰退の地理的考察 地學雜誌 昭和18年3月號

(2) 著者藏 (3) 元祿4年 黒正文書

第1表 寛政7年の隠岐の石高と耕地

村 名	田 高 (合)	牧畑高 (合)	麻畑高 (合)	上畑高 (合)	計 (合)	田反別 (反)	畑反別 (反)
津 戸	28404	8004	64	—	36472	41	42
都 萬	606351	82892	4564	105	693912	509	643
那 久	123772	41911	3576	—	169259	111	297
油 井	52904	30926	1244	—	85074	42	245
南 方	290751	51470	2376	—	344597	199	335
苗代田	90449	21947	1320	—	113716	67	126
那久路	78006	18832	640	—	97478	63	131
都萬路	61593	14354	592	—	76539	47	94
小 路	133860	34638	1448	—	169946	112	166
郡	153511	21655	—	—	175166	123	110
山 田	195190	39886	1656	—	235076	148	268
一 宮	61536	6354	—	—	67890	52	19
北 方	189376	29280	1104	—	219760	160	99
代	71715	5496	1305	—	78516	55	15
久 見	120962	33309	—	—	154271	83	162
伊 後	105133	31631	—	—	136764	79	243
穩地郡計	2363512	472587	19889	105	2856093	1911	2995
西	110479	39853	—	—	150332	152	317
湊	58312	15495	—	—	73807	58	108
中	157852	39530	—	—	197382	128	203
元 屋	109612	17854	—	—	127466	90	95
飯 美	15544	7785	—	—	23329	11	36
布 施	19532	23775	2544	—	45851	13	120
卯 敷	8669	28888	1392	—	38945	7	181
大 久	71510	110685	1624	—	183819	61	496
釜	49325	17807	400	—	67532	40	78
大 來	49037	73021	2168	—	124226	63	383
津 井	57627	13116	1352	—	72095	52	41
飯 田	28909	—	—	—	195751	128	186
東 郷	221688	65311	5904	3846	296749	207	414
大 光 寺	51743	6023	1105	2690	61561	37	41
有 本	183227	29732	525	9440	222924	136	204

尼 寺	16154	1561	—	—	17715	11	11
國 分 寺	102206	8927	—	—	111133	81	46
原 田	162299	68145	—	15528	245972	206	448
上 西	183693	58484	—	2912	245089	136	302
上 東	64297	20800	—	1140	86237	50	138
平	60476	6616	—	—	67092	47	51
蛸 木	53808	6059	—	—	59867	55	39
加 茂	89622	9067	1212	—	99901	87	53
箕 浦	9254	3157	920	—	13331	11	18
岸 濱	8442	965	840	—	10247	9	5
今 津	40619	19506	140	—	60265	38	104
西 田	80232	6315	548	—	87095	80	48
下 西	173155	42253	468	—	215876	139	183
惣 社	27727	1501	—	—	29223	24	7
護 國 寺	29224	1849	—	—	31073	24	6
八 尾	186500	34134	2750	475	223859	154	121
目 貫	69123	11564	—	—	80687	57	6
周吉郡計	2717823	818687	23892	36031	3596433	2240	4171
島 後 計	5081335	1291274	43781	36136	6452526	4344	7566
海 士	795283	270426	17382	—	1083091	574	875
宇 津 賀	72389	33522	1920	—	107831	75	214
豐 田	55507	42124	1124	—	98755	41	296
知 々 井	55070	176223	2811	—	234104	46	1020
太 井	3700	73600	2062	—	79706	3	441
布 施	52238	177712	3231	—	234181	42	1116
崎	33690	294123	4463	—	332276	27	1489
福 井	118488	121159	1082	—	240729	95	880
海士郡計	1186365	1188889	34615	—	2409867	903	6331
知 夫 里	129373	721100	13864	—	864337	116	3891
浦 郷	76602	1097200	13646	—	1187448	67	11545
美 田	243600	382400	9122	—	635122	185	2736
別 府	456615	67200	601	—	1134416	38	542
宇 賀	4200	349600	4214	—	358014	3	2953
知夫郡計	499390	2617500	41447	—	3158337	409	21672
島 前 計	1685755	3806389	76062	—	5568206	1361	24008

隠岐合計	6767090	5097663	119843	36136	12020732	5660	31574
------	---------	---------	--------	-------	----------	------	-------

各村に全部存在していること、麻畑や上畑は石高の上では極めて僅かで且つ島前の村では麻畑は全村にあるが島後の村では之を缺くものが多いこと、田反別は 566 町で之に對する高は 6767 石、畑反別は田の六倍即ち 3157町で之に對する高が 5097 石を占めている。つまり田畑は面積からいふと畑が絶對的に多いが石高は田高に及ばないと言う極めて特色ある事實が指摘出来る。しかもその理由が牧畑高にあることは畑高の 97% を牧畑高がしめている事に依つて明らかである。此の様な耕地面積と石高との不調和は免率の相違から來ているのである。寛政 7 年の免率を集計平均して見ると田は島前では二つ八分三厘、島後では三つ二分、麻畑はどちらも四つ四分、上畑は四つ、牧畑は島前では九分六厘、島後では一つ二分である。即ち牧畑の取りは田の $\frac{1}{3}$ と言ひ得る。牧畑の耕地利用率は年に依つて異なるが一輪轉のうち (4 年週期) $\frac{1}{2}$ ⁽⁴⁾ であるので牧畑の取りは田の取りと比較する場合には $\frac{1}{6}$ 内外と考え、更に牧畑の耕種 (大麥・大豆・小麥・粟・稗等) に依つても差があるのでそれ等を考慮に入れて決定しなければならぬが $\frac{1}{6}$ から $\frac{1}{8}$ 位になつて來るのである。畑高の 3% をしめる麻畑高、上畑は年々畑であり、免率も田より大の四つ〜四つ四分であるから畑面積中で占める割合はその 1% にも及ばない。従つて 3157 町の畑のうちその 99% 以上が牧畑であると言う事が出来よう。かく考えてみれば近世隠岐の農業は水田耕作と牧畑に依つて代表されていたと見てよからう。然らば斯の様な牧畜耕作と言う特殊な農業經營形態が何故に隠岐に於いて此 ⁽⁵⁾⁽⁶⁾ の様に重視されたのであろうか。牧畑の發生論に就いては此所では論じな

(4) 拙稿 隠岐農業推移の地理的研究 地理學研究 昭和 17 年 9 月、10 月號

(5) 錦織英夫、島の農業形態 刀江書院 昭和 8 年

(6) 石田龍次郎、隠岐島前の牧畑 地評 5 卷 2 號

いが、封建社會に於いて牧畑が特に隱岐に於いて畑作農業として立地したのは理由がなければならぬ。「惣而畑方之儀、地免惡敷御座候に付、四枚に分け、壹年に壹枚宛休牧に仕、牛馬押込飼に仕候、依之初春村々に而牧の垣を仕、田植前に駄追仕候而、其一牧江放置申候、殘三物江は大豆、小豆、粟(稗)三色を仕付……尤右一牧之休牧茂7月末より麥畑に拵申し候」とは寶曆2年の東鄉村の牧畑に就いての記述であるが牧畑の耕種は輪轉の關係上大麥(小麥)、大豆、小豆、粟(稗)又はそばの4耕種に限定されているのである。之等の雜穀は米穀の不足を代替すべき自給食糧なのである。大麥が之等作物の中で特に重視せられ、寛政7年の場合に於いては「前略5089石5合、此取521石2斗4升4合、大麥248石1斗7升9合、大豆150石1斗6升3合、小麥27石5斗6升5合……下略」となっている。牧畑で麥が作付される場合を「本畑」と稱しているが麥作を重んじるが故である。集約的な畑作が技術的に困難な表土の薄い丘陵性の玄武岩の山地で、施肥も牛馬放牧間の糞尿と豆科作物栽培に依る窒素肥料の自給に依つて、土地所有關係の複雑な土地を、4～8kmの遠方の土地まで行つて耕作すると云うことは、單なる自然的條件の不適に依り土地の集約的利用(普通畑化)が困難であつたという他に、牧畑自體の所有と用益が不確定であつた、即ち耕作に關しては私的に放牧に關しては共有的であるという用益形態と、地主に依る土地獨占と村落社會に於ける階級の分化の激しさ、即ち村々に於ける敷を制限された本百姓と、土地なき「間脇」^{マツキ}と稱する⁽⁸⁾⁽⁹⁾隷農に依つて支えられて居る名子制度、之を基調として封建的社會經濟的關係が資本蓄積の貧困と相俟つて耕作の集約化を許さなかつたのである。従つ

(7) 寶曆2年東鄉村より大庄屋宛の訴狀文(齊藤文書)

(8) 拙稿 徳川時代に於ける隱岐の村落經濟 經濟史研究 昭和19年6月～9月號

(9) ク 隱岐に於ける名子制度 歴史學研究 昭和18年1月號

て粗放的な牧畑經營に依存して大多數の貧農のミゼラブルな生活が維持せられていたのである。「盆が來たらこそ麥に米混ぜてそれに小豆をちらばらと」と言う盆踊の唄が生れる所以である。

更に封建社會の隠岐では食糧自給というものが絶えず危険にさらされていて牧畑の相對的重要性を維持していたのである。即ち食糧自足に對する島民の聲は「御當國之儀北海之離島、土薄之所柄にて年々旱損等不斷有之、作物不熟に相成百姓共扶食に差支、3月より10月まで他國米買入不申候而は扶食取續不申、他國通路も不便利に御座候得ば前々より奉願御成箇米拜借仕候⁽¹⁰⁾」或は「貢稚上納之儀、惣體出來柄稀少之土地柄に而、國民の扶食に引足不申故を以て古來より正米を一旦藏納致し、其正米を村々人口に應じ貸渡、石代は翌年4月15日半納、5月15日に半納、兩度に皆納致候」という有様で貢納米を代銀上納に置いて米は食糧に買受けてい⁽¹⁹⁾る。之を「御拜借米」と言う。備荒對策として各村「地下倉^{ヂゲクラ}」を持ち貯米、貯麥、貯銀を行つていた。記録では元祿4年から明治4年まで之を確認し⁽¹⁰⁾得る。かくて牧畑作物を食糧にしても「村中畑に作立候大麥、大小豆之分飯料余計は無御座候……一昨年類外の凶作就而者米麥は無之大小豆食用仕・野菜・海草・貝類その他木の實を取專食用仕候……下略⁽¹¹⁾」と言う具合で、封建社會に於ける孤立的環境地域の食糧對策というものゝ性格が想像出來、隠岐に於ける牧畑の封建社會に於ける意義は、食糧自給上極めて重要で、當時の牧畑は自給食糧の生産を目的としていたものであると言う事が明らかである。

III. 村落社會と牧畑の分布 牧畑が隠岐の村落においてどのように分布していたかに就いては第1表に依つて明らかであるが、從來全島的な資

(10) 拙稿 徳川時代の隠岐の荒政 經濟史研究 昭和17年

(11) 島後周吉郡六屋村天保9戊辰5月 上帳(岡部文書)

料が発見されなかつたので、島後の牧畑の分布に就いては先學も之にふれていない。第1表を精算してみると牧畑分布は隱岐の全村に分布はしているもののその分布状態はかなり差異がある。浦郷村は 1150 町歩に及ぶ大面積を占めて居るに對し、島後の惣社、護國寺、目貫等は 1 町にも及ばない。文化3年の書出帳⁽¹²⁾を集計し、現在の村にあてはめ、1平方秆當りの牧畑、水田面積と人口に對する關係（戸數不明）を表示すると第2表の様に

第2表 文化3年に於ける牧畑と水田

村 名	面 積 (平方秆)	牧畑面積 (反)	水田面積 (反)	牧 畑 密 度	田 密 度	人 口 (人)	1人當 水 田 (畝)	1人當 牧 畑 (畝)
西 郷	7.15	126	211	1.8	3.0	1355	1.6	0.9
東 郷	24.87	2097	551	8.7	2.2	1730	3.2	12.0
布 施	18.49	336	31	1.8	0.2	654	0.4	5.0
中	32.00	965	527	3.0	1.6	1395	3.7	6.0
中 條	39.53	1246	728	3.2	1.8	2005	3.6	6.0
磯	20.98	417	388	2.0	1.6	976	3.9	4.3
五 箇	50.43	1524	1109	3.0	2.2	2443	4.5	6.2
都 万	50.09	1263	758	2.5	1.5	2203	3.4	5.7
島 後 計	243.54	7556	4344	3.0	1.6	12721	3.5	5.9
海 士	33.93	6321	903	19.1	2.7	2447	3.9	26.0
黒 木	39.82	6236	226	15.5	0.5	1656	1.3	38.0
浦 郷	16.85	11531	67	72.0	0.3	1068	0.7	108.0
知 夫	13.89	3881	116	29.8	0.7	881	1.3	44.0
島 前 計	104.49	24968	1312	24.0	1.2	7052	1.8	35.4
隱岐合計	348.03	31504	5660	9.0	1.6	19773	2.8	15.9

なる。つまり島前地區と島後地區に於いては牧畑のウエートが異つてゐる。島前に大で島後に小である。そして此の關係は水田に於いては逆關係であつて、水田面積の少ない所程牧畑の比重が大である。（布施村は山岳地故例外）此の事は自給食糧方策の牧畑の性格を如實に示すものと言ひ得

(12) 文化3年村々書出帳 横地文書

よう。島後において牧畑高が田高を超しているのは布施、大久、卯敷の3村で、急峻な山岳地で水田・牧畑共に過少地域の山村で島前の場合とは性格が異なる。1人當の分布を見ると浦郷の108畝が最大で西郷の0.9畝が最小である。假に1戸5人平均の家族として計算してみれば浦郷では1戸當の牧畑經營面積は前者に於いては1町8反、後者に於いては3反となる。粗放的な牧畑と水田に依つて維持せられ、海に面しない中條村は農山村と考えてよいと思うが、今之に例を取つてみれば水田1反8畝と牧畑3反が農家の平均經營農地と言う事になる。之等を比較考察して、ると隠岐の農業經營は極めて過小農的であつたと言う事になる。知夫里では知夫島全體が4區分され輪轉し1枚の平均の廣さは100町程度、浦郷では8區に別れ2つづつ組んで4轉し、之は平均の廣さ145町であつた。就中田良牧は203町に及んで隠岐最大のものである。然るに島後のものは之に比べればはるかに小面積で、元屋村の場合では寛文2年の場合計10町のがそれぞれ奥牧2町7反、飯美谷牧3町1反、高平牧1町2反、楯屋牧2町8反、同じく釜村の場合では同年宮田牧2町1反、森牧1町2反、大久路牧2町1反である（輪轉關係は犬來の假屋牧7町2反と入會で實施されて⁽¹³⁾いた）。伊後の牧畑等は更に面積が小で坪水、西向の兩牧はそれぞれ1反歩しかない。此の様な小さな牧でも輪轉が行われていた。各村に數多く残つている御成ヶ割付等は此の事を證明する資料である。島前の牧畑が何故に單位面積が大で島後のが小であるか、島後と島後では地形に著しい差があり、前者では傾斜の急な土地が多く牧場化が出來ず玄武岩台地、岩屑堆積地、第三紀層の丘陵、流紋岩の台地等が局部的に散在し、牧畑がそのような土地を選んで立地しているのに反し、島前は全島100～200m内外の玄武岩の

(13) 檢地帳に依る

(14) 拙稿 隠岐島後の地形の研究 地球の科學 3の4 昭和24年

緩傾斜丘陵であるので、聚落のある所謂家敷畑を除いては殆ど牧畑となり、浦郷の様に全面積の85%の1134町が牧畑である事が可能であるからである。島後では牧畑になり得る緩傾斜地がすくなくなかつたから、森林地帯のうち交通の便のある所は焼畑として利用せられ、植林の合間には之が雑穀生産上重要な役割をなしたが、島前には焼畑は存在しなかつた。かくの如く牧畑は近世封建社會に於いては食糧自給の必要上隠岐全島にくまなく分布し、就中島前の場合には之が唯一の食糧自給手段であつた。

IV. 農業生産と村落社會 技術的に極めて後進的な牧畑生産と言うものが維持せられ、その低い生産性の上に停滯していた隠岐の農業生産は村落社會の機構等に如何なる性格をあたえたか。牧畑經營に於ける耕種並に輪轉の固定性は牧畑經營を主體とする農業の性格の改變が行われなかり固定・因襲的である。従つて牧畑に於ける農業技術の發展と言う事は事實上あり得ないし、作種の改變進歩と言う事も考えられない。麥、大小豆、蕎麥、粟、稗の自給食糧生産で終るわけである。つまり牧畑自體が極めて封建的な性格の農業經營であると云い得よう。かゝる封建的性格が島嶼農村にはどの様に耕作されてその庶民的生活に結びついていたか、慶長18年の檢地帳に依ると隠岐の土地所有形態が原始的な形態で示されていて興味深い。當時海士村94戸中、田畑所有者として檢地帳に表れているものは公文、役人、肥前、助四郎、右京介、太夫、刑部の7人と寺院10の17のみで他の大部分は表れていない。つまり30以上土地を所有せぬ家があつたわけである。之を牧畑別に検討して見ると段合牧では筆類49中公文19、公文分6、安國寺14、役人6で、苞屋牧では55筆中公文22、右京介4、寺5、公文分1で、羽仁栗牧では45筆中公文16、右京介12、役人9で横手牧では17は筆中公文9、役人3、寺3、肥前1、公文分1となつて

(15)

いる。元祿・貞享の頃の郷帳集成である隠州記・増補隠州記に依ると、土

地を持たぬ農民が「間脇」と言う名稱で呼ばれ各村別々に本百姓と共にその戸数が併記されている。⁽¹⁶⁾ その詳細に就いては先に論じた事がある故略すが平均して60%の戸数を占めている。⁽¹⁷⁾ 之等は全然土地のないものであるが之に準ずる小前の者の数を合すれば、恐らくは80%以上のものが零細農民であつたと想像せられる。されば隠岐に於ては名子制度が近年まで存続し⁽¹⁸⁾ 遙役勞働と親方・子方の主従關係が強固に持續されて來たのであろう。島前の崎村の渡邊家、海士村の村上家（検地帳中公文と記されている家、公文とは名主・庄屋のことである）島後釜村の佐々木家（隠岐甲尾城主の子孫）大久の齋藤家、卯敷村の安部家、中村の田中家、西村の田中家、原田村の若林家、代村の八幡家、都萬村の野津家等は當該村落の獨占的土地所有者であつた。農民間に於けるかかる階級分化の激しさは小作關係に於ても極めて單的に表れ、水田に於ける7割の高率小作料、牧畑に於ける6割の高率小作料を生んで⁽¹⁹⁾いる。遙役勞働は此の他である。公文即ち庄屋はこの上更に村の住民を1年平均して3日づゝ私用に使うことを「公事」と稱し、之が庄屋の譲り證文に明記せられて承認されている。斯の如き封建的社會機構の下に於いては「間脇」は資本の蓄積は勿論のこと、その最低生活の維持さえ困難であり、その故にこそ更に一層の地主への從屬形態が強化せられ「株小作」或は「丸小作」と稱する土地は勿論、家屋、山林、原野、牛馬、肥料、農具、種子、飯料までも一括小作し、身分的に完全に從屬する小作制度をも發生せしめた。商品經濟の世界に孤立的環境の故に参加し難かつた交通未發達の封建制下の島嶼は、その自然經濟の原始的形態

(15) 縣廳藏 古文書より

(16) 拙稿 徳川時代に於ける隠岐の村落經濟、經濟史研究 昭和19年 6~9月號

(17) 拙稿 隠岐の聚落、地理學研究 昭和18年 7月號

(18) 拙稿 隠岐に於ける名子制度、歴史學研究 昭和18年 1月號

(19) 松江稅務署 島根縣、鳥取縣小作慣行調査 明治35年

を容易にはぬけ得られなかつたのである。かくして島嶼農業生産が農奴制の基調の上に營まれていたのであつた。

V. 結び 封建制下の隠岐農業の特質に就いては更に論ずべき事も多いが、此所では一先ず牧畑農業の性格を分析し、その自然經濟的特質を明らかにして、封建制下の島嶼に於いて食糧自給が最大緊急事であり、牧畑はその故にこそ、不利な自然條件と封建的社會機構の中に於いて、停滯的な生産を余儀なくせられつゝも存続したのであつた。此の封建的農業の存続の基調には土地所有を前提とする農奴制が存在し之を維持していたのであつた。

(昭和 22 年 1 月 23 日受理)

“Makibatake” under the Feudal System

—The Economic Structure and Disintegration of

Island Community (I)—

Toyaji Tanaka

The “Makibatake” system, one of the most peculiar agricultural types in feudal Japan, is still in practice in Oki Islands in the Japan Sea. It arose in feudal days to cover the shortage of food supply caused by economic isolation owing to the undevelopment of communication. The fields were put to alternative use for cattle raising and farming, corn and bean being the chief products. The intermittence in cropping, limited variety of crops and the common use of land have prevented the individual farmer from agricultural reform. It is little to be wondered that the system strongly reminds us of its feudalistic characters.